鹿児島放送

事業の名称

情報の源を体感セヨ　小学生の「情報教育」特別課外授業

共同で事業を実施した団体

鹿児島大学教育学部附属小学校と連携し、早稲田大学文化構想学部の久保田治助准教授（社会教育）による監修のもとで実施

事業概要

インターネットやSNSの活用を学ぶ「情報教育」のカリキュラムの一部として、児童に私たちメディアが仕事としている“伝えること”を学んでもらう。具体的なテーマは、「日々のニュースはどうやって作られているのか」「災害など命にかかわる情報をどのような所から収集し、皆の元に届けているのか」「生放送を発信するためにどれだけの人が関わり、どんなことに気をつけているのか」など。

火山の専門家への直接取材や、生放送のスタッフとして実際の仕事を担うといった普段できない体験を取り入れることで、小学３年生でも飽きることなく、情報発信の役割や重みを体感できるよう工夫した。

◆対象

鹿児島大学教育学部附属小学校の３年生（４学級の約140人）

◆活動の流れ

10月３日（月）：授業「ニュースの作り方を学ぶ」（45分、４学級合同）

はじめに、早稲田大学・久保田准教授から授業の狙いを説明。続いて、鹿児島放送（KKB）の田中早苗アナウンサーによるニュースのつくり方の解説を、ビデオで紹介した。ビデオは記者の取材と原稿出稿、デスクによるチェック、映像編集、放送……という一連の流れを５分ほどにまとめたもの。情報を素早く正確に放送するために多くの役割があり、それぞれで間違いが無いよう確認していることなどを伝えた。児童らからは、「ひとつの番組で何人くらいのスタッフが関わっているか」「夜中でも働いているのか」といった質問が出た。

10月25日（火）、31日（月）：専門家に直接取材「桜島が大噴火するとどうなる？」（４時間、１クラスごと）

児童たちは記者として、「桜島で大噴火が起きるときにはどのような予兆があるか」「大噴火のときに、自分たちの住む鹿児島市街地には何が起きる可能性があり、どう行動したらよいか」を専門家に直接取材した。京都大学の桜島火山観測所では、中道治久

准教授の案内で特別にテレメーター室（記録室）にも入り、「どうやって桜島の噴火の兆しを捉えているか」の説明を受けた。桜島の観測体制は世界最高クラスであり、何十年にもわたる火山性地震等の記録がアナログとデジタルで保存されている。また、NPO法人桜島ミュージアムの福島大輔理事長から、108年前に起きた大正大噴火が桜島のどこから噴火し、火山灰がどれだけ積もったか、住民はどのように避難したかなど説明を受けた。また、桜島までの往復のバス内では、鹿児島市危機管理課の職員から、大正大噴火の出来事をまとめたアニメの紹介やクイズの出題があった。

11月11日（金）、18日（金）：職業体験「生放送はどうやって発信している？」（４時間、１クラスごと）

児童たちがKKBで生放送している情報番組『ですです。』（金、９時55分～10時30分）のスタッフとなり、カメラマン、フロアディレクター、タイムキーパー、リポーターの各役として実際の生放送を体験した。普段目にする放送の裏側でどれだけのスタッフが関わっているのかを、生放送の緊張感とともに体感してもらうのが狙い。放送１時間前にはスタジオに入り、大人のスタッフから指導を受け、リハーサルに臨んだ。リポーター役はVTRを交えて、桜島の噴火にかんして他クラスの児童が学んだことをMCや視聴者に伝え、局舎ロビーからの中継では、気象情報を伝えた。フロアディレクター役は、タイムキーパー役がインカム越しに伝えるカウントをもとに、VTR明けのタイミングをMCに伝え、小道具などの“出しはけ”も担当した。

職業体験の後には、『ですです。』にオンラインで出演しているジャーナリスト・酒井綱一郎さんが、クイズ形式でメディアリテラシーについて児童たちに解説した。

11月28日（月）：授業「まとめ」（45分、４学級合同）

児童たちが桜島での取材や生放送体験を通じて、気づいたことや感想を伝えあった。早稲田大学・久保田准教授は今回の特別授業での４つの気づきとして、①災害の怖さを実感すること、②緊急に対応する難しさ、③危険を人々に伝える手段、④お互いに協力して助け合いをすることの大切さ――を挙げた。そのうえで３つの目標として、（ⅰ）学校でも身近な危ないところをみんなで話し合おう、（ⅱ）いつも落ち着いて動くこと・考えること、（ⅲ）テレビや報道の大切さを知ろう――を呼びかけた。

◆放送展開

『Ｊチャン＋』（ニュース番組、月～金、18時15分～55分　※金は～18時45分）

10月３日（月）：「小学３年生が『伝える』を学ぶ　ニュースや防災現場で２カ月」

10月25日（火）：「小学生が桜島をまなぶ！専門家に聞いてみよう」

10月31日（月）:「小学生が桜島をまなぶ！専門家に聞いてみよう」
11月29日（火）:「情報を読み解き発信する力　メディアリテラシー　小学生が学ぶ」
『ですです。』
11月11日、18日（いずれも金）：特集、天気コーナーなど

事業の成果

附属小の「情報教育」担当教師から、本事業を通じて児童たちが学んだことについて寄せられたコメントは以下のとおり。
・情報を発信する際の責任を、実感を伴いながら理解することができた
・情報を発信するまでに多くの人が関わり、さまざまな役割があることを理解できた
・これらの学びを自分の学習に生かそうとする姿がみられた

児童たちから、「まとめ」の授業で挙がった感想は以下のとおり。
・多くの犠牲者が出た大正大噴火のことや、火山の観測をしている施設のことが学べてよい経験になった
・マグマが意外とゆっくりと動くということに驚いた
・実際にテレビ放送で映る部分は少しだが、映らない部分でどのような仕事があるのか体験できてよかった
・タイムキーパーの仕事は難しかった
・一つの番組を放送するには、いろんな人が協力しないといけないと思った

「情報教育」の担当教師からの提案を受け、本事業の対象を小学３年生とした。ICTやプログラミングを本格的に学び始める時期にあり、具体的な体験を通じて、情報を活用するための知識や心構えを学んでほしいという願いによるものだった。そのため、ただ見学して終わりでなく、実際にプロの仕事に触れる機会をつくろうと考えた。企画の具体化にあたって、児童たちが生放送に出演するだけでなく、カメラやフロアディレクター、タイムキーパーといった裏方も担う方針とした。また、鹿児島市の児童にとって身近な活火山・桜島を題材に、大噴火の情報をどのようにつかみ発信するのか、過去の事例も含めて学ぶ機会も設けた。その結果、学んだ内容を生放送で防災情報として紹介するという多層的な取り組みが実現できた。

学校のカリキュラムの一環であり、時間にはどうしても制約があった。生放送当日、児童たちは放送開始１時間前にスタジオ入りし、カメラやインカムの操作法を学ぶなど慌ただしいスケジュールとなった。一方、番組スタッフの間では、「子どもたちが失敗や間違いをしても、うまくフォローしてプロの矜持をみせよう」といつも以上の連帯感が生まれるなど、制約によるプラスの面もあった。短い時間で自分たちの普段の仕事を分かりやすく説明するため、その意義や役割を再確認するきっかけにもなったと思う。

以　上